

# みんなの翻訳実習～みんなの翻訳第5報～

内山 将夫<sup>1</sup>、影浦 峯<sup>2</sup>、Anthony Hartley<sup>3</sup>、Martin Thomas<sup>4</sup>

1. 情報通信研究機構、2. 東京大学、3. 東京外国語大学、4. University of Leeds

## 1. はじめに

世の中を正確に理解するためには、翻訳が必須である。なぜなら、世の中の出来事や人々の考えの多くはテキストで表現され、そのテキストは任意の言語で書かれるにも関わらず、読み手が理解できる言語は限定されるからである。

実際、様々なテキストが翻訳されている。そして、その翻訳の多くがボランティア翻訳者によるものである。ところが、ボランティア翻訳者は、プロの翻訳者とは異なり、十分な翻訳支援ツールを保有していない。そのため、ボランティア翻訳者を支援するようなWebサイトを構築することにより、ボランティア翻訳者を支援できると考えた。そして、これにより、世の中を正確に理解する役に立つものと考えた。

「みんなの翻訳」はボランティア翻訳者を支援するサイトであり、次の特徴を持つ [1]。

- 翻訳メディアとしての役割：ユーザは、著作権を正しく処理して、翻訳結果を共有・公表できる。
- 翻訳支援ツールの提供：ユーザは、ブラウザから利用可能な翻訳支援エディタ QRedit [2] を利用できる。QRedit は次の辞書を活用できる。三省堂『グランドコンサイス英和辞典』、『グランドコンサイス和英辞典』、英辞郎、ユーザが登録した用語辞書等。

みんなの翻訳は、現在3000人の登録者が16500文書を登録しており、1日のユニーク訪問者は300人、1日のログインユーザ数（翻訳者数とほぼ等しいと考えられる）は5～10人前後である。これらの統計量から、みんなの翻訳は、ボランティア翻訳者にとって有用であると判断できる。

一方、みんなの翻訳ではカバーできない問題で、ボランティア翻訳で重要な問題があることが、みんなの翻訳に関するワークショップを通じてわかった [3]。その問題というのは、「ボランティア翻訳者の育成」である。

つまり、ボランティアで翻訳をしたい人はたくさんいるのだが、その中で、定常的に翻訳をするようになる人は少ないという事である。この問題に対処するとともに、より一般の翻訳教育に資するために、みんなの翻訳の一環として「みんなの翻訳実習」システムを構築した。そのため、みんなの翻訳実習は、ボランティア翻訳者だけでなく、一

般の翻訳教育コースにも使えることを目標としている。

## 2. みんなの翻訳実習

まず、ボランティア翻訳や実務的な翻訳は、多くの場合は、複数人による協調作業である。その典型的なプロセスは次のものである。これを翻訳プロセスと呼ぶ。

1. クライアントが翻訳を依頼する。
2. 翻訳会社や翻訳グループは、その翻訳のためのプロジェクトを作る。
3. プロジェクトマネージャーは、そのプロジェクトに参加するメンバーを募集し、各メンバーの役割を定める。役割としては、翻訳者、校正者、用語管理者などがある。なお、一人が複数の役割をすることもある。
4. プロジェクトマネージャーと各メンバーは翻訳スケジュールを定めて、そのスケジュールに沿って、翻訳を完成する。
5. 完成された翻訳から、翻訳メモリや用語集を整理して、次のプロジェクトに備える。
6. クライアントに翻訳結果を送付する。

みんなの翻訳実習では、上記のような典型的な翻訳プロセスにおける1と6を除いたプロセスに加えて、様々な翻訳プロセスを遂行可能である。また、翻訳プロセスの過程で生じる、原文・訳文・修正訳・修正理由・コメント・対話履歴等の翻訳資源を自動的に保存し、その統計量を閲覧することができる [4]。

## 3. みんなの翻訳実習の効果

みんなの翻訳実習のユーザは、主に指導者と学習者からなる。指導者としては、翻訳学部の教員などを想定し、学習者としては、翻訳学部の学生など、今後、職業翻訳者やボランティア翻訳者になる可能性が高い人を想定している。現状、複数の翻訳授業での試験的な利用をしている。

指導者にとって、みんなの翻訳実習を使う利点は次のものである。

- 協調的な環境での翻訳教育を授業に容易に取り込める。これにより、翻訳現場の主流となりつつある協調的翻訳 [5] に対応可能となる。また、協調的な環境での翻訳教育は学習効果を増すとされている

[6]。

- 翻訳プロセスを可視化できる。みんなの翻訳実習では、未実装ではあるが、プロジェクトメンバー間のインタラクションを可視化したり、翻訳プロセスにおける各プロセスの活性度を可視化する仕組みを備える予定である。これにより、従来は感覚的に把握していた部分を視覚的に把握できる。
- 翻訳資源を蓄積・再利用できる。つまり、毎年の翻訳授業の成果を翻訳資源として蓄積できるとともに、それを翌年の翻訳授業に再利用できる。

学習者にとっての利点は、次のものである。

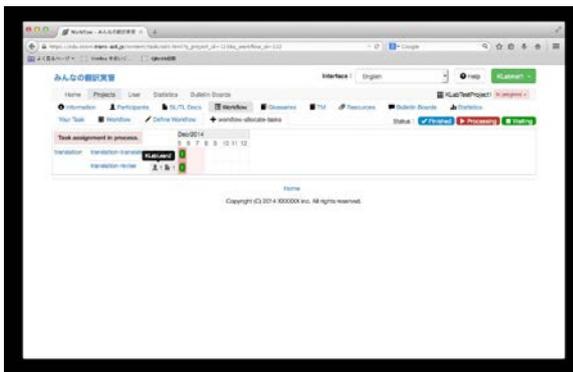
- リアルな翻訳体験が得られる。実際の翻訳プロジェクトと同様に、協調的な翻訳を体験できる。
- 翻訳支援機能が活用できる。辞書引きなどを補助する機能を活用することにより、テキスト翻訳が容易になる。
- 翻訳結果を発表できる。翻訳授業により翻訳した文書は、みんなの翻訳から発表できるので、翻訳をする動機が高まる。

#### 4. みんなの翻訳実習のコア機能

##### 4.1 プロジェクトとワークフローの設定

翻訳プロセスの基本単位はプロジェクトである。各プロジェクトには、そのメンバーと翻訳対象の文書が所属し、ワークフローに従って、翻訳プロセスを進める。

みんなの翻訳実習では、これらの設定が簡単にできるようになっている。たとえば、下図は、一人のメンバーに、翻訳タスクを割り当て、それをワークフロー上に配置したものである。なお、ワークフローとは、誰がいつどのようなタスクをするかを、時間軸に沿って、整理したものである。



##### 4.2 翻訳文書のバージョン管理

複数人が文書を翻訳するときには、バージョン管理が必須である。みんなの翻訳実習では、翻訳支援エディタ QRedit を利用することにより、翻訳支援と同時にバージョン管理が可能である。

具体的には、

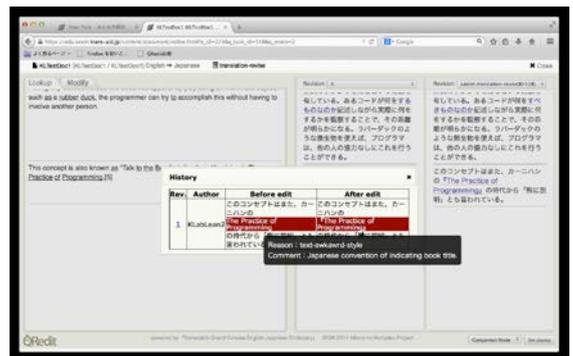
1. まず、原文のみが QRedit に読み込まれると、翻訳担当者はそれを翻訳する。これにより、原文と訳文のペアが格納された文書ができる。
2. 次に、校正者は、上記文書の訳文を校正する。このとき、校正箇所に対して、校正の理由を記入する必要がある。たとえば、下図は、「するものなのか」という訳を「すべきものなのか」に校正し、その理由として「義務的なトーンが弱いため、対比が曖昧になっています」とコメントしている。



##### 4.3 翻訳プロセスの俯瞰

翻訳教育においては、翻訳プロセスを俯瞰する必要があるので、そのために、みんなの翻訳実習は次の機能を持つ。

- 同一訳文のバージョン間の比較機能。たとえば、下図は、バージョン間での校正箇所とコメントを表示している。



- 翻訳者間のインタラクションの可視化。現時点で未実装であるが、掲示板におけるメンバー間の対話等から、メンバー間のインタラクションを可視化する予定である。

#### 5. 体験者募集中

みんなの翻訳実習は、翻訳授業に十分に使えるレベルまで完成してきました。これを翻訳授業に利用したい方は、影浦峡までご連絡ください。

## 謝辞

本研究の一部は2013-2017年度学術振興会科学研究費補助金基盤（A）「翻訳知のアーカイブ化を利用した協調・学習促進型翻訳支援プラットフォームの構築」（課題番号：25240051）に基づくものである。英日・日英の基本対訳辞書として三省堂より高品質辞書『グランドコンサイス英和辞典』『グランドコンサイス和英辞典』の利用許可をいただいている。

## 参考文献

1. 内山将夫、阿辺川武、隅田英一郎、影浦峽、みんなの翻訳、言語処理学会第15回年次大会発表論文集、pp. 184-187、2009.
2. Takeshi Abekawa and Kyo Kageura. QRedit: An integrated editor system to support online volunteer translators. In *Digital humanities*, pp. 3-5, 2007.
3. 科研基盤(A)「包括的な翻訳情報資源を実現する統合翻訳支援サイトの構築」最終年度総括ワークショップ、2012.
4. Anthony Hartley, 影浦峽、Martin Thomas, 内山将夫、共同翻訳を考慮した「翻訳教育用みんなの翻訳」システム～みんなの翻訳第4報～、言語処理学会第20回年次大会、発表論文集、pp. 254-257, 2014.
5. O'Hagan M. Introduction: Community Translation: Translation as a social activity and its possible consequences in the advent of Web 2.0 and beyond. *Linguistica Antwerpensia*, 10:1-19. 2011.
6. Kiraly D. A Social Constructivist Approach to Translator Education. St. Jerome, Manchester. 2000.